

授業評価結果に対する  
教員のフィードバックに関する調査結果

東京工業大学 大学院 社会理工学研究科

平成21年度 前学期

平成22年1月

大学院 社会理工学研究科 評価委員会

## 1. 目的

授業に対する学生による授業評価のアンケート結果をもとに、教員が自分の授業をどのように自己点検し、授業の改善を図るかを検討することにより、今後の教育評価や改善方策の策定に役立つ。

## 2. 調査対象,調査方法

平成21年度前学期授業の評価に協力してもらった授業31科目に対して、担当教員に科目別の評価結果及び全体の傾向を知らせた際、その評価結果を見て、今後どのように授業改善を行うかを尋ねた。  
調査の実施、集計、分析については、教育工学開発センターの協力を得た。調査票の配布、回収などの事務作業については大学院社会理工学研究科事務係にお世話いただいた。

## 3. 調査時期

調査期間は平成21年9月2日から平成21年11月4日までである。

## 4. 調査項目

学生アンケートの実施状況、調査結果に対する予想と評価結果の乖離、今後の授業に対する工夫、について質問を行った。

## 5. 調査分析結果

### 5.1 回答数

回答科目数は14で回答科目率は45.2%である。回答者の所属専攻別の回答数を表1に示す。

表1 回答数

専攻区分	回答科目数	調査対象科目数	回答科目率(%)
人間行動システム	3	9	33.3
価値システム	5	9	55.6
経営工学	3	6	50.0
社会工学	3	7	42.9
合計	14	31	45.2

注) ここでの調査対象科目数は、授業評価アンケートの回収があった科目数であり、教員のフィードバック調査を依頼した科目数である。

## 5.2 調査結果への予想

調査結果の予想と実際との違いについて、以下の質問を行った。

質問1. 別紙アンケート項目(1~16, a~C)についてお伺いします。結果は予想された範囲内でしたか、それとも予想外だったでしょうか。

(1) 自分が予想した範囲より評価が高かった項目(複数回答可)の番号を記入して下さい。

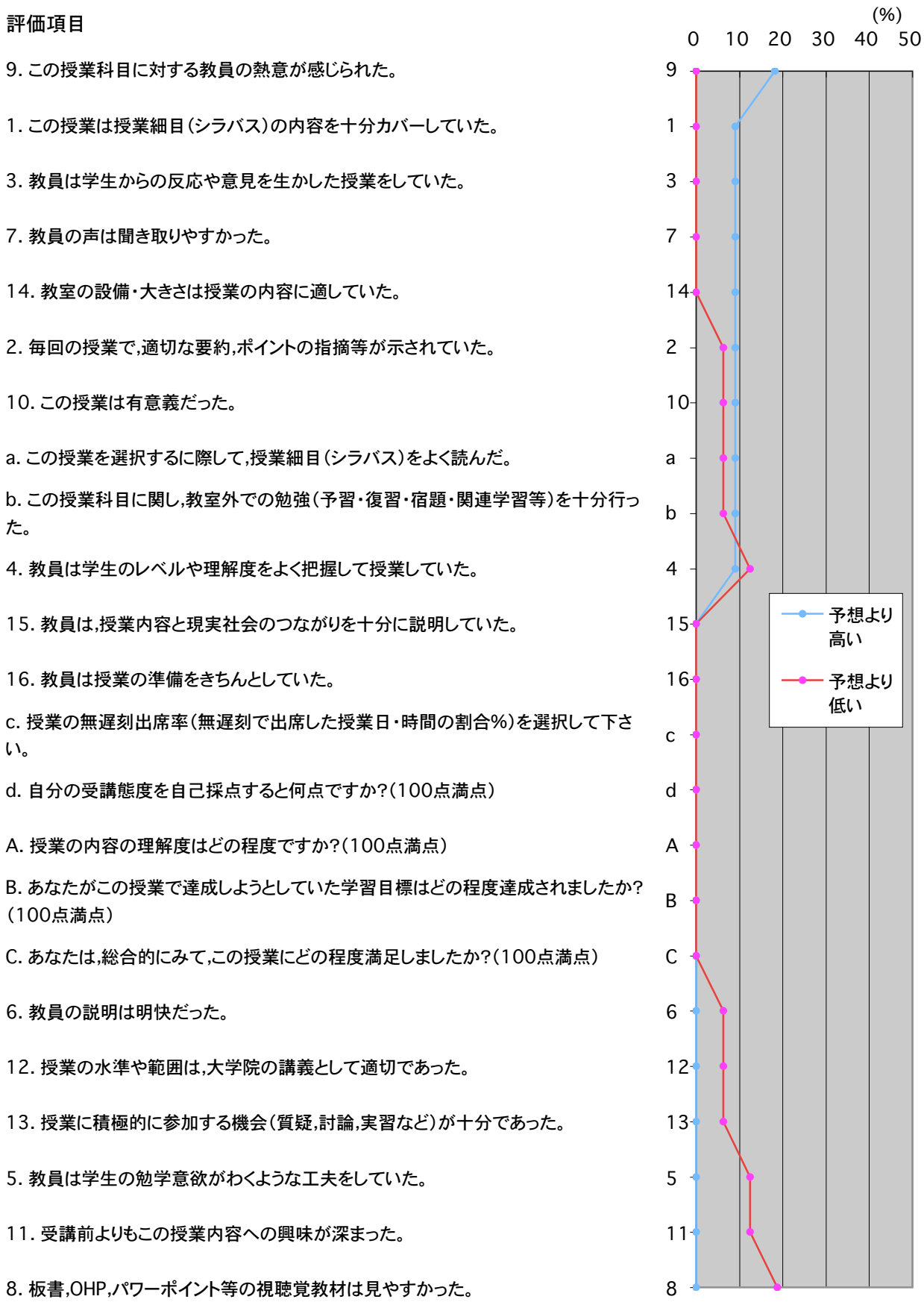
(2) 自分が予想した範囲より評価が低かった項目(複数回答可)の番号を記入して下さい。

学生による授業評価が教員の予想より高かった項目、予想より低かった項目を下記の表2及び図1に示す。尚、選んだ項目は複数回答であるため、回答数の割合で示してある。

表2 学生の授業評価と教員の予想

評価項目	予想より高い		予想より低い	
	頻度	割合(%)	頻度	割合(%)
9. この授業科目に対する教員の熱意が感じられた。	2	18.2	0	0.0
1. この授業は授業細目(シラバス)の内容を十分カバーしていた。	1	9.1	0	0.0
3. 教員は学生からの反応や意見を生かした授業をしていた。	1	9.1	0	0.0
7. 教員の声は聞き取りやすかった。	1	9.1	0	0.0
14. 教室の設備・大きさは授業の内容に適していた。	1	9.1	0	0.0
2. 毎回の授業で、適切な要約、ポイントの指摘等が示されていた。	1	9.1	1	6.3
10. この授業は有意義だった。	1	9.1	1	6.3
a. この授業を選択するに際して、授業細目(シラバス)をよく読んだ。	1	9.1	1	6.3
b. この授業科目に関し、教室外での勉強(予習・復習・宿題・関連学習等)を十分行った。	1	9.1	1	6.3
4. 教員は学生のレベルや理解度をよく把握して授業していた。	1	9.1	2	12.5
15. 教員は、授業内容と現実社会のつながりを十分に説明していた。	0	0.0	0	0.0
16. 教員は授業の準備をきちんとしていた。	0	0.0	0	0.0
c. 授業の無遅刻出席率(無遅刻で出席した授業日・時間の割合%)を選択して下さい。	0	0.0	0	0.0
d. 自分の受講態度を自己採点すると何点ですか?(100点満点)	0	0.0	0	0.0
A. 授業の内容の理解度はどの程度ですか?(100点満点)	0	0.0	0	0.0
B. あなたがこの授業で達成しようとしていた学習目標はどの程度達成されましたか?(100点満点)	0	0.0	0	0.0
C. あなたは、総合的にみて、この授業にどの程度満足しましたか?(100点満点)	0	0.0	0	0.0
6. 教員の説明は明快だった。	0	0.0	1	6.3
12. 授業の水準や範囲は、大学院の講義として適切であった。	0	0.0	1	6.3
13. 授業に積極的に参加する機会(質疑、討論、実習など)が十分であった。	0	0.0	1	6.3
5. 教員は学生の勉学意欲がわくような工夫をしていた。	0	0.0	2	12.5
11. 受講前よりもこの授業内容への興味が深まった。	0	0.0	2	12.5
8. 板書、OHP、パワーポイント等の視聴覚教材は見やすかった。	0	0.0	3	18.8
合計	11	100.0	16	100.0

(注：割合(%)は四捨五入によって小数第1位まで表示している)



### 5.3 教員が行った授業の工夫

教員が平成21年度前学期の授業でどのような工夫をしたかについて、以下のように尋ねた。なお、この質問への回答者数は13人である。

質問2a. 平成20年度の授業と比較して、平成21年度の授業では以下のことを意識的になさいましたか？ それぞれの項目について、該当する番号に○印をつけて下さい。

1. 意識しなかった。 2. いくらか意識した。 3. 大いに意識した。

教員が行った授業の工夫について図2に示す。また、その頻度分布を次の頁に示す（図3）。

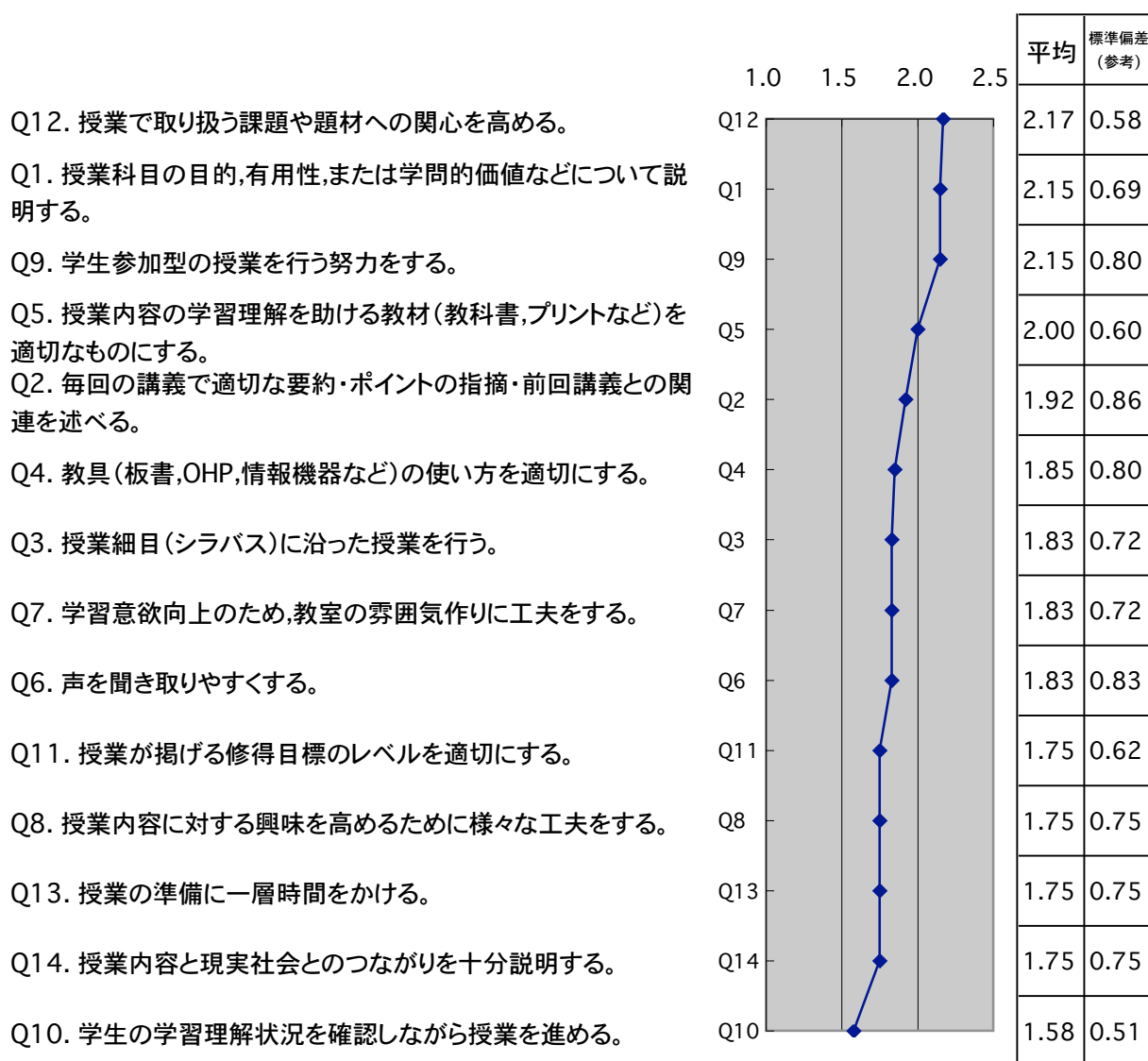
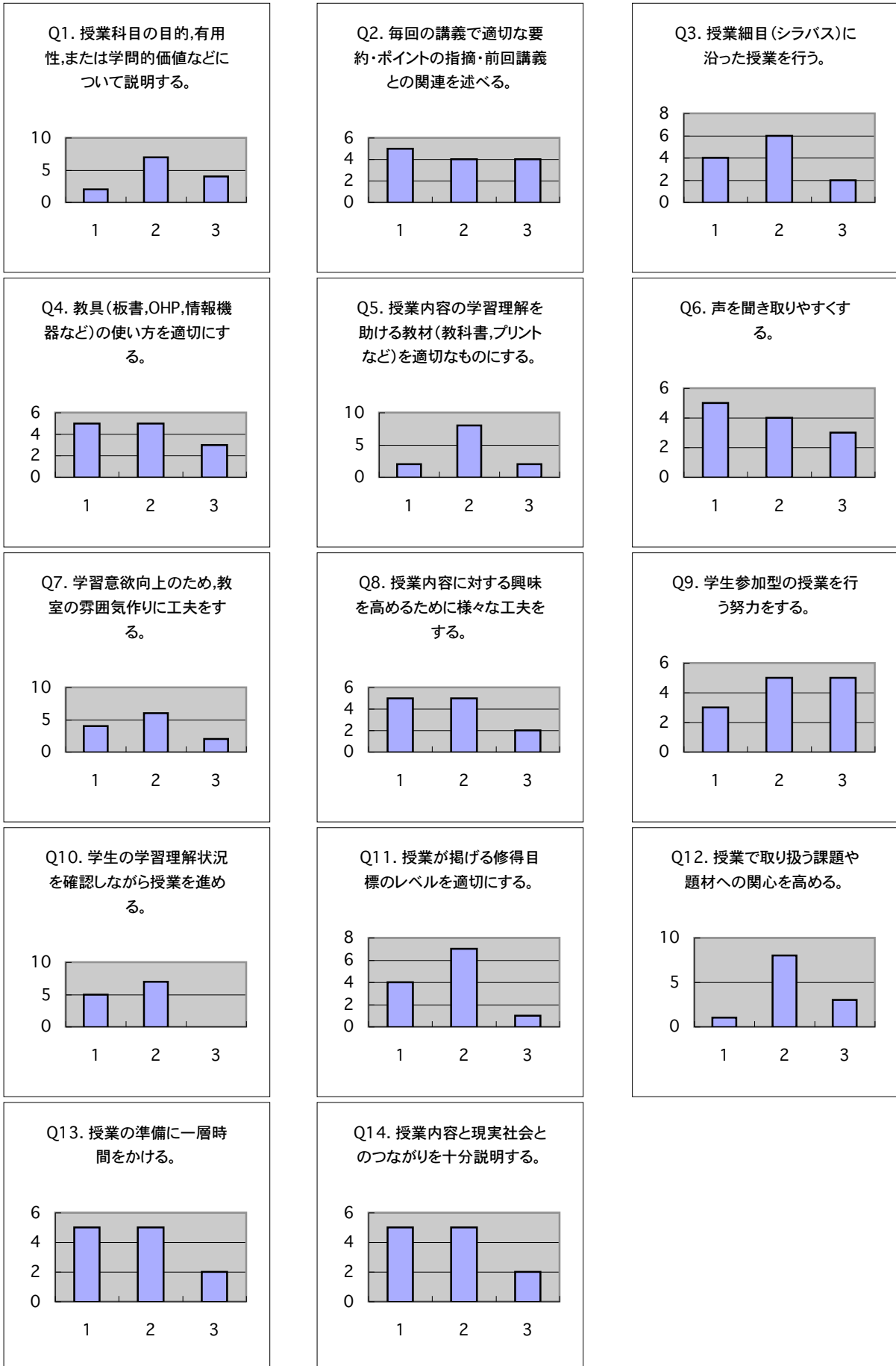


図2 教員が行った授業の工夫

図3 教員が行った授業の工夫(頻度分布)



## 5.4 教員の今後の授業の工夫

評価結果を見て、今後の授業をどのように工夫するかについて、以下のように尋ねた。尚、この質問への回答者数は12人である。

質問2b. 本評価結果をご覧になって、「今後の授業においてどのような工夫を検討されるか」をお伺い致します。それぞれの項目について、該当する番号に○印をつけて下さい。

1. 現状でよい。 2. いくらか工夫する。 3. 大いに工夫する。

教員が検討している授業の工夫について図4に示す。また、その頻度分布を次の頁に示す（図5）。

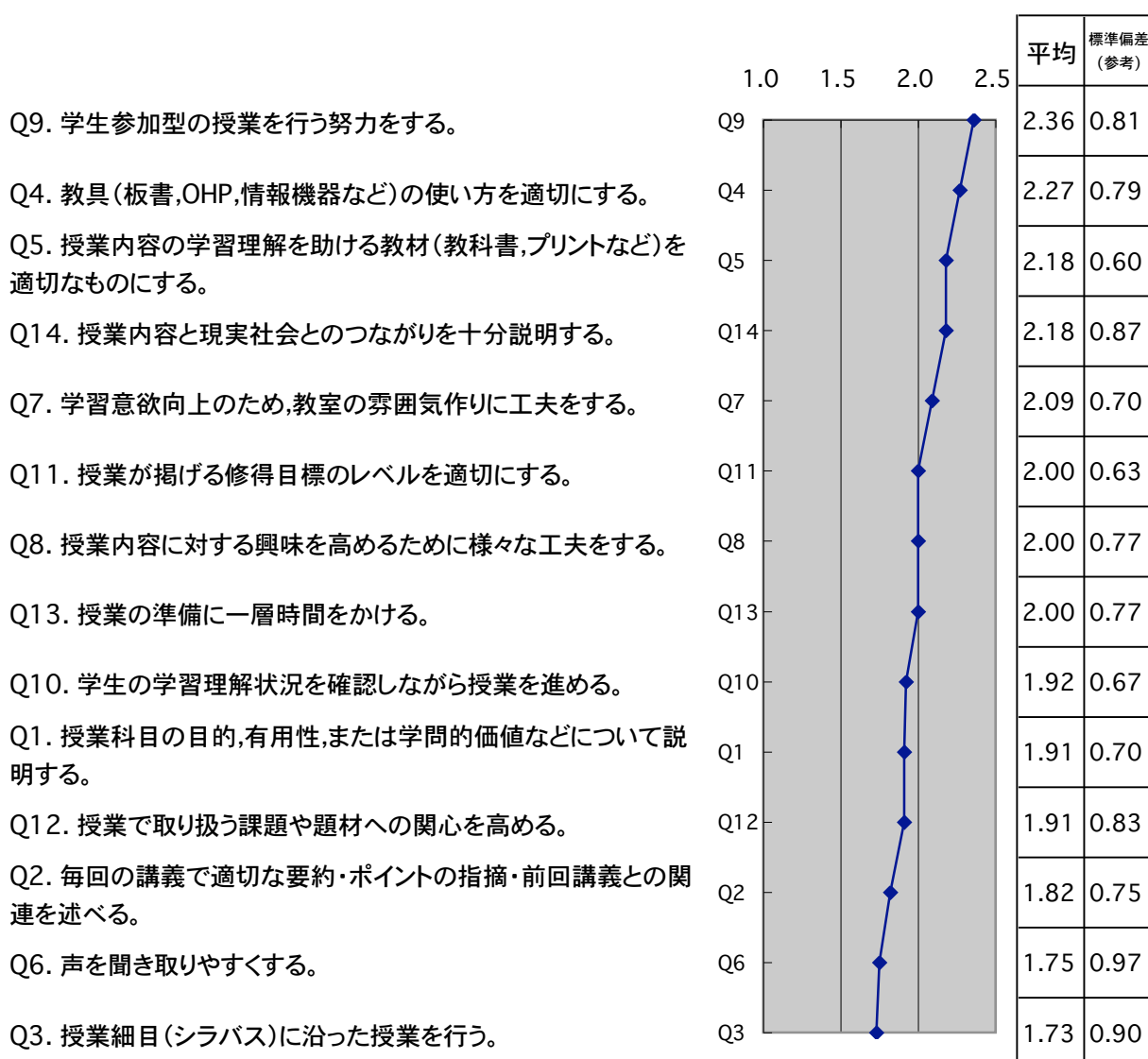
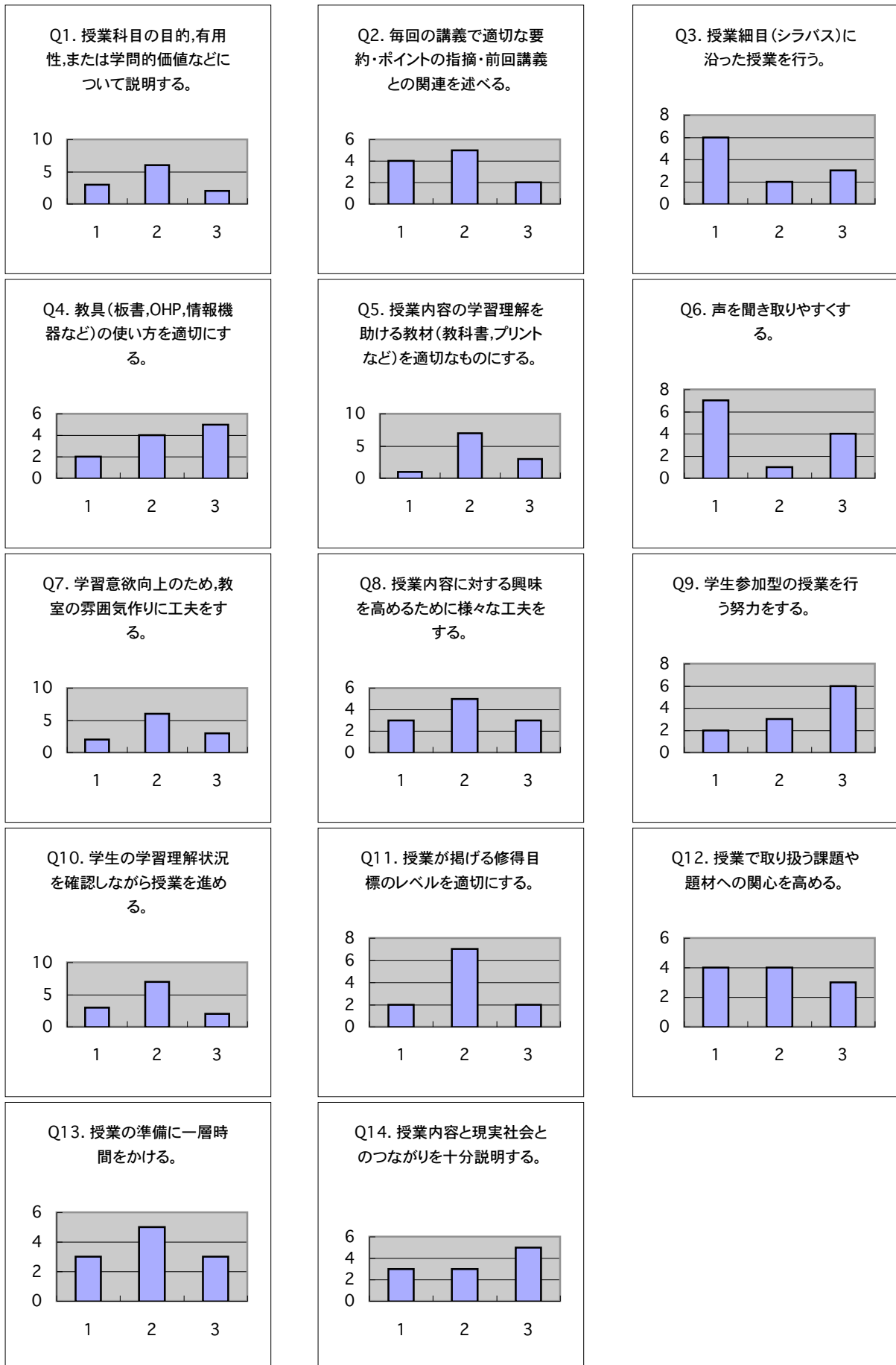


図4 今後の授業の工夫

図5 今後の授業の工夫(頻度分布)





## 5.5 授業評価の有効性について

授業評価結果を各教員にフィードバックしたり、評価報告書を作成したりする授業改善のための活動がどの程度役に立っているかを尋ねた。この質問への回答者数は13人である。

問題3. 以下それぞれの項目について、該当する番号に○印をつけて下さい。

1. 全くそう思わない。
2. あまりそう思わない。
3. いくらかそう思う。
4. かなりそう思う。
5. 非常にそう思う。

各質問項目に対する5段階評価の回答の平均値を図6に、頻度分布の割合(%)を図7に示す。

Q1. 授業評価結果はだいたい予想通りだった。

Q2. 授業評価結果は役に立った。

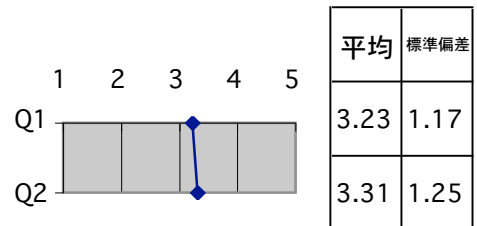
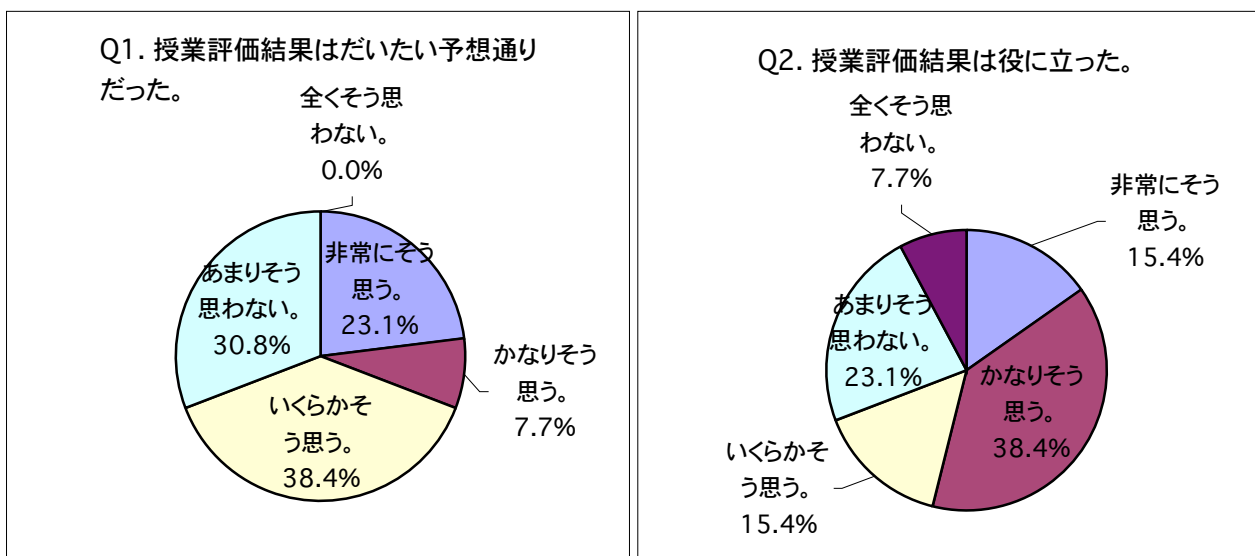


図6

図7 授業評価の有効性



「Q1. 授業評価結果はだいたい予想通りだった。」の質問に対して、「非常に予想通りだった」と答えた教員は回答者の23.1%、「かなり予想通りだった」は7.7%、「幾らか予想通り」は38.4%である。「あまり予想通りでなかった」は30.8%、「全く予想外だった」は0.0%である。「予想通り」の方に答えた教員は、回答者の約69.2%、「予想外」の方は約30.8%である。

「Q2. 授業評価結果は役に立った。」の質問に対して、「非常に役に立った」と答えた教員は、回答者の15.4%、「かなり役に立った」は38.4%、「幾らか役に立った」は15.4%、「あまり役立たなかった」は23.1%、「全く役立たなかった」は7.7%である。この結果より、フィードバックに回答した教員の約69.2%が授業評価が役に立ったと答えている。

以上の結果より、フィードバック調査に回答した教員の約69.2%がだいたい予想通りの評価結果を得ており、約69.2%が「授業評価結果は役に立った」と回答している。

さらに、「授業評価は役立った」と答えた教員に対して、評価が予想範囲内であったかどうかについて、また、「授業評価は役立たなかった」と答えた教員に対して、評価が予想範囲内であったかどうかについて、表にまとめて表示した（回答者数13人）。

単位 (人)	評価は予想範囲内	評価は予想範囲外	横計
授業評価は役立った	7	2	9
授業評価は役立たなかった	2	2	4
縦計	9	4	13

この表を、回答者全体に対する割合(%)で表記すると、

単位 (%)	評価は予想範囲内	評価は予想範囲外	横計
授業評価は役立った	53.8	15.4	69.2
授業評価は役立たなかった	15.4	15.4	30.8
縦計	69.2	30.8	100.0

となる。以上より、「評価は予想範囲内」且つ「授業評価が役立った」と回答した教員は、回答者全体の53.8%になっている。その他は、表の通りである。

## 6. 教員自由記述

これはアンケート調査での自由回答欄に記入された意見を分類し、まとめた（回答数7）。教員から貴重な意見が寄せられたが、多様な意見を取捨選択することなく、できるだけ元のままで記載するように努めた。但し、分類上、一つの文章を幾つかに分ける場合もある。ほとんど同じ内容のものは文末の（ ）内に類似回答数を示し、重複をさける。回答者や個人を特定する名称等は\*\*でふせている。

・本科目は、本専攻の必須科目であるが、これまでカリキュラム的に問題が多かった（秋学期にまたがって実施し、10月に発表会を行い、前期科目なのに後期に成績を提出していた；M1の履修生は夏期休業中に本科目の発表準備に追われ、短期留学・インターンシップ・研究室の研究出張などが全くできなかった）のを大幅に改善し、内容を厳選し密度の濃いものにして8月の補講期間には終了するようにした。本専攻としては、初めての試みであり、短期間に実習を終わらせるため、各グループに対し、親切な個別指導を行ったことが全体として功を奏したといえよう。

・本講義は、\*\*准教授と私の2名で担当し、前期の前半は\*\*先生担当、後半は私が担当している。本アンケートの実施は、前期の終了する頃であるので、前半の授業評価は反映されていないと考えられる。講義が2名以上で担当している場合には、各担当者毎に授業評価が必要であると考えられる。

・いつもQ12とQ4が平均より低いのですが、その度に「学生は、レベルが低いと思っているのか、高いと思っているのかわからなく、どう改善してよいのかわからない」と書いています。来年度からは「難しいか、易しすぎるか」の項目を加えて下さい。そうしていただかないと、改善しようもなく、このアンケートは無意味です。

・授業評価アンケートの集計結果のフィードバック時期が、随分早まって良くなったと思います（同一学期内）。授業の記憶が鮮明ですので。成績報告と同様に、本調査・フィードバックも電子化（Web化）されると良いと思います。何年かおきに、評価項目の見直しや、評価の良否の具体的な内容に関する学生へのヒアリング（定性）調査をされると、教員側の改善工夫に資すると思います。

・前年度より評価が下がった理由ははっきりわからなかったが、講義内容の改善に努めます。

・本科目はその性質上、抽象的な内容を扱うため、受講者の理解を助ける種々の工夫を行っており、受講者の大半から支持されていると理解している。以下はその工夫の一部である。1. 東工大OCW上で予習用設問を毎回掲げ、要点を授業前に把握させる。2. 各回の授業を講義部分と質疑応答・討論部分に分けて、受講者各人が教員や他の受講者との討議を通じて理解を深める。3. 学期の中間時点で行う無記名の学生授業評価により、授業の進度・方法を点検する。にもかかわらず、必須選択科目であるために、内容への関心を持たない少数の学生を含めて、極めて多数の学生が履修する結果、Q8・Q14等の数値が低くなっていると思われ、遺憾である。

・評価項目を大幅に減らして、評価の理由を明記してほしい。例えば、「全くそう思わない」と記入した人には、その理由を明示する責任があると思う。評価は、出席率が80%以上の学生がすべきではないだろうか。現在のFormatは再検討すべきである。